
出奔幼公主 是 騷動的始事

志水円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出奔幼公主 是 騒動的始事

【Zコード】

Z5149Y

【作者名】

志水円

【あらすじ】

タイトルの意味は幼き公主の出奔これ騒動の始まりのことくらいの意味です。

削除済みですがアルカディアさんにかつて投稿していた作品です。公主というのは昔の中国でいうところのお姫様という意味で、つまりお転婆姫の家出が騒動を巻き起こします。

ということもありふれた内容です。

まだのお姫さまではなく古代中国で信仰された西王母の公主な
のですが。

昔話の語り口調の様な文体（本文を「」参照ください）で書く習作です。

別の連載の息抜き的に書いておりますので超スローペースでの連載になります。

序

黒狼、という名前の青年がありました。

彼はごくごく平凡な仙人でありました。

そんな黒狼くんでしたが、たつた一つ普通ではない事が有りました。

なんと彼は西王母様の血族だつたのです。
西王母様は尊称を九靈太妙瑤地金母元君(きゅうれいたいみょうようめいきんぱくじん)（長いですな）。最高位の女神にして、全ての女仙を統括する偉大なお方でございます。

王母様の宮殿「瑤地」(よしえ)は基本的に（蟠桃宴(ばんとうえん)という宴会の時以外）男子禁制であり、これは世界の支配者である玉皇上帝（天帝）陛下とて、例外ではありません。

黒狼くんの母上は西王母の娘として生まれましたが。仙人となる才能、つまり仙骨を持たず、天人のような長い寿命も持たなかつたため、赤子の時に人界へ里子に出されました。

彼女が成長し産まれたのが黒狼くん、つまり彼は西王母様のお孫様なのです。

仙骨を持つて産まれた黒狼くんは、星宿に導かれるかのように、ある仙人に見出され、紓余曲折の末その仙人に弟子入りし、長い修行の末に昇仙（仙人になること）を果たしたのです。

さて、孫に甘い西王母様は、特例として黒狼くんに「瑤地出入り」を許しました。

マダームからギャル（ついでに口）まで揃い踏みの瑤地、なんとも羨ましい話です。いはやはもつとも色々と気苦労も多いそうですが。

「黒狼！！」

声を掛けられ、微笑を浮かべ振り向いた黒狼くんは、おもわず絶句いたしました。

眼前で屈託無く笑う幼い少女は、（畏れ多い事に）自身の祖母である王母様の第四公主、瑠姫様。

つまり彼の「叔母」を見やり

手の平で顔を覆い、深いため息を吐きます。

「瑠姫様、たとえ私が貴方様の甥っ子であるうと。そんなはしたない格好で男の前に出てはいけませんよ」

大方、瑠地の守護獣である開明獸の子供か、王母様の騎獸である白虎の子供、あるいはその両方と、取つ組み合いでもしていたのでしょうか。

朝方女官が綺麗に結い上げた髪は解け、顔のてっぺんから足まで土まみれ。

おまけに、身につけた上等な衣服は裂けてボロボロ、凹凸の無い肢体を惜しげも無く、陽光の下に露にしておりました。

「いいじゃないか、あたしのおしめを替えてくれたのは黒狼なんだし」

「…瑠姫様」

黒狼くんが押し殺した声と共に瑠姫様を睨みます。

「む～、最近の黒狼は玄女か」姐のようだ」

ふてくされた仕草も可愛らしいですね。

とはいえ先日、九天玄女様と第一公主様に「甘やかしすぎだ」と釘を刺されたばかりの黒狼くん。

王母様の片腕である玄女様と、よく似た性格の第二公主様は…怒らせなくともコワイ。

恐い、怖い、強いお方たちです。

「もう帰つてしまつのか？」

「ええ、すでに用事は済んでおりますので。本来この瑠地は男子禁制、あまり長居はできません」

「ちえ、剣術の稽古に付き合つて欲しかつたのに」「それも先日叱られたのです」「瑠姫が武術ばかりで他の稽古事を怠ける」と…

「なあ稽古が駄目でも、何か面白い話を聞かせてくれないか？」「読書でもなさつたら如何です？」

「眠くなるから嫌だ」

屈託無く笑う。駄目だこりや……

「（仕方ないか。つくづく、私はこの幼い「叔母」に甘い。）わかれました、では開明獸の所でなら」「やつた！！」

「さてその前に 疾ツ！！」

術を使いぼろぼろの衣服を直し、汚れを落とします。これぐらいなら長々と口訣（呪文）を唱える必要は無いようです。

「あ、ありがとうございます」

「さあ一気に飛びますよ、しつかり捕まつて」

瑠姫様を抱き上げると、黒狼くんは空を駆けます。

瑠姫様が黒狼くんの腕の中で歎声を上げています、まだ自力では飛べない瑠姫様には、ただ飛ぶだけでもおもしろいのでしょうか。

短い空の旅を終え、瑠地の端っこ、開明獸の守る門までやつて参りました。

開明獸は人頭獸身の獣、その知能は高く、聰明で謎かけなどを好む靈獸でござります。

皆さんが良くご存知のスフィンクスとは違ひ人は食しません。因みにメスでございます。

一人は門の楼閣の上に腰掛け、取り止めの無い話を始めます。

「さて、これはまだ私が修行中だった時の話なのですが……」
「この冒険談を聞かせたのが、後にとんでもない事件に発展するのですが……」
「この時の黒狼くんにはそれを知る術はございませんでした。」

嗚呼後悔は先に立たず

ね？結構気苦労が多いでしょう？それでも羨ましいって？
まあそれはそうですね……

第四公主、瑠姫様の外見年齢は十歳ほど。とは云え実年齢はひとつ百を越えております、ただ瑠姫様は黒狼くんの母上とは違い“仙骨”を持っています、それとは別として天人として長い寿命（そしてそれに見合つた成長速度）を持っていますので、精神年齢は見た目と変りません。むしろ性格的にやや幼い、と言えるでしょう。

やんちゃでおてんば。身体を動かすのは好きだが、じつと座っているのは苦手。裁縫などの細かい事は非常に不得手。

髪は童子のようにまとぬ。身につける物も余計な装飾の無い上着に袴男の子

と見間違えてしまつような容貌。このまま成長すれば、女の園、瑠地ではさぞ人気が出ることでございましょう。

さてその瑠姫様。何やら牀（ベッドのことです）の上に物を並べております。もはや時刻は夜だ

といふのに、寝巻きに着替えず、若竹を思わせる碧色の質素な（とはいえ上質の綿製、金糸銀糸の縫い取りが施されているのですが）格好をしております。

「仙丹よし。黒狼から貰つた短刀よし。準備よし」

並べていた者を一つ一つ確認し、それを小さな巾着に詰めています。明らかに許容量を越えていますが、そこには仙界の物、普通の巾着では有りません。

しかし、この様子は……おや？

「四姐、何してらつしゃるんです」

「ひつ……」

思わず悲鳴を上げ、とつたに巾着を後ろに隠した瑠姫様。恐る恐る振り返りますと、そこにはすぐ下の妹君、第五公主太真様が立つておりました。四姐とは、四番目のお姉さまと「う意味、つまり瑠姫様のことです。

「太真か。脅かすなよ！！」

胸を撫で下ろし、小声で怒鳴る瑠姫様。明らかに拳動不審。それを見逃す太真様ではありません。

「四姐、何をなさっていたのですか？」

鋭いですな。見た目は八歳ほどの太真様ですが、精神年齢は瑠姫様と同じか、やや上といった感じでしょうか？

「これぐらいでびっくりなさるなんて。なにか後ろめたいことをしていたのでしょうか？」

「何でも無い」

「姉妹で隠し事なんて……太真は悲しいです」

本当に悲しそうにうなだれる太真様、おや眦に泪が…

「ちょ…泣くなよ！（仕方ないな…）内緒だぞ？」

しぶしぶ瑠姫様が言つと、につこり笑つて太真様が領きます。嘘泣き？

とはいえ、とても嬉しそうな太真様、大人びているとは言へ、やはり年頃の少女らしく「内緒話」

がお好きなようですね。

瑠姫様は巾着から綺麗に磨かれた玉を取り出し、太真様に見せました。

「こないだ、黒狼が使つてゐる門の場所を見つけたんだ」

門とは、黒狼くんの住みか（師匠と同居中）と瑠地を繋いでいる、トンネルのような物です。

「あら、黒哥々いらっしゃつていたのですか？」

哥々といつのはお兄さん、というような意味で。厳密には甥っ子

なのですが、親しい年長の男性に、使うこともある呼び名です。

「うん」

「太真もお会いしたかったのに……姉々ばっかりずるい」「ぶすっと太真様が膨れております。瑠姫様は「まづい、ここで機嫌を損ねると計画がおじやんだ」と思い、必死に言葉を取り繕います。

「明日もお母様に呼ばれているらしいから、明日会えるよ」「それで、姉々は何をなさるうとしていたのですか？術具を盗つてまで」

「人聞きの悪い、借りただけだよ」

小声で「無許可で」と付け加える瑠姫様。

「それいうの、世間一般では『盗る』といふのですよ
まったく太真様の言う通りです。

「つるさいな。とにかく、ちょっと冒険してくるだけだからね」
そういうて、逃げ出そうとした瑠姫様の服の裾を、がっしりと掴む太真様。につこり微笑みとも
でもないことを言わされました。

「じゃあ太真も行きたいです」

「ええ……」

嫌そうな表情で叫ぶ瑠姫様。足手まといだ、と顔に出であります。

しかしにこりと笑つて太真様が言いました。

「内緒にして欲しいのでしきう？」

瑠姫様、TKO負け。

「でも黒哥々のお住まいは神崖山でしょ、うへーとも歩いていける場所ではありませんわ」

夜の宮殿をこそそと歩くお一人、瑠姫様は周囲に気を配り、忍

び足。しかし太真様はのんびりとてとてと歩いています。

「静かにしろよ。小虎に頼めば良い」

「ああそうですね」

小虎とは何者か？宮殿を抜け出したお一人は、まっすぐ庭園の一角を目指しております。

「お～い小虎」

そこに寝ていたのは、大型犬ほどの体格の虎。美しい白い毛並みを持つ、まだ若い靈獸・白虎のようです。

「小虎？ よろしいですか」

太真様呼びかけると、うたたねしていた白虎が目を開けました。

「んあ？なんだい二人とも、こんな夜更けに」

さすがに靈獸、人語を解す様です。

「おい小虎、なんであたし呼んでも起きなかつたのに、太真だと起きるんだよ」

「四姐、たまたまですわ。たまたま」

お姉様を軽くあしらう太真様。瑠姫様は膨れています。

「あのね黒哥々に会いに行きたいの、つれてってくれません？」

白虎の小虎はあぐびすると、再び眠る構えに入ってしまいました。

「もう小虎」

「冗談言っちゃいけないよ二人とも。そんなことに手を貸したら、僕が玄女様にきつ～いお叱りを受けるじゃないか」

「なあなあ、あたしとお前の仲だらう。あたしに免じて」

とつ組み合いをやらかした仲では、とても説得力がありませんよ。「だめだめ。内緒にしてあげるから。手水を済ましておやすみなさい

「なんだよ子供扱いして……」

いや子供ですから。見た目も、言動も、やることなすこと全部……

何やら思案していた太真様が、口を開きます。顔に浮かぶは、やわらかな微笑。

「ねえ小虎」

猫撫で声で呼びかける太真さま、小虎の咽下をくすぐりながら、囁きます。

「あちらにはマタタビがいっぱい生えてるのよ
マタタビは猫（科の動物）にとつては麻薬も同然。たとえ靈獸といえど例外はありません。小虎の鬚がぴくぴくと動きます。

「哥々に頼んで秘蔵のマタタビ酒を出してもらいましょうか？ねえ四姐」

そして虎は酒が大好物……あらよだれが。

「う、うん。そうだなあたしと太真が頼めばイチコロだし」「なんだかちょっとびり妹が怖い瑠姫様、ぎこちなく返事をします。
「しようがないなあ。二人だけで行かせたら危ないし、僕が護衛に付いて行つてやるよ」

しぶしぶ言う小虎。しかしマタタビの誘惑に負けたのは明白です。
「わあ！－ありがとう小虎」

抱きつく太真様。う～むこのお年での手練手管、末恐ろしい。

黒狼くんの住まいは神崖山竹林洞。

洞主は黒狼くんの師匠である、麗虎元君緋桜様。

虎から昇仙されたお方で、人の形を取れば、妙齡の美女に変化なさいますが、性格はおおざっぱで、傍若無人、無類の酒好きで食道楽、囮碁を趣味としますが弱く、負けると当り散らす……と手の付け様がない一面が、多々あるご婦人でございます。

このように人間以外の物（生物とは限りません）が、年を経て仙

人となることは、そう珍しくありません。その際かつての性癖が残るのも同様に、珍しくあります。

本来、仙人となつた黒狼くんは独立し、師匠の下を離れるのが普通です。

しかし生活能力ゼロの上、問題児の緋桜様を放置も出来ず（公共の迷惑であります）、洞府に留まり、弟弟子ができるのを待ちながら、今までと変わぬ生活（師匠の世話と尻拭い）を送つているのです。

どうも黒狼くんは「女難の相」があるようですね。リア充爆発しろ！おっと失礼。

さて神崖山は人界に在るもの、神仙が住むにふさわしい深山。名前が示す通り、切り立つた崖のような山、麓には虎が多く生息しており、近くの邑の住人達も近寄ることは有りません。

そこへふよふよと小虎の背に乗つた少女が一人やつてきました。
「ねえ小虎、もつと早く飛べないのか」「瑠姫、無茶を言わないでほしいよ」「あら、そんなに重いかしら？」「一人ならともかく一人はちょっと」「まだ若い小虎には、少女一人は少々重量オーバーのご様子。「失礼ね、女の子にもてないぞ？」「ほつといて欲しいな」

麗虎元君の庵は山腹。小虎は慎重に降下していきます。その時ふと崖の下を見た小虎はぎょっとしました。折り重なる様に人間が一人、打ち捨てられているのでは

ありませんか！…しかもその背
格好には見覚えがあります。

小虎は崖の下に向かつて急降下しました。背に乗るお一人が、急
加速に悲鳴を上げます。

「うわっ！…おい小虎何事だ」

「しゃべると舌噛むよ、黙つていって」

さて幼き公主様方がちょっとした冒険に出たことなど露知らず、翌日黒狼くんは搖地へとやつて参りました。

昨晩は宴会に出席した（肉や酒を断つといつ戒律を持つ洞府もございますが、案外仙人様方は宴会がお好きだつたり致します）緋桜様が騒ぎを起しきぬよつに必死のフォロー、しかし努力虚しく結局は大騒ぎの末、後始末に三面六臂の大活躍、当然ろくろく宴席のご馳走を味わうこともなく、ほぼ飲まず食わずで一睡もせず…（涙）

とはいえた王母様のお招きとあつては断ることはできません。ま、もつとも一日やそこら飲まず食わず一睡もせず、などとすることは修行中の道士でもやつてのけること、問題は精神的な疲労、気疲れという奴でござりますね、でもリア充だし別にいいんでね？
…こほん。さて私の個人的な感想はともかく、王母様に拝謁しました黒狼くんは、思わず言葉を失いました。

本来麗しきマダームといった外見の王母様が、なぜかちんちくりんの口リ美少女になつていたからです。

「王母様…そのお姿は一体…」

「ちょっと桃を食べ過ぎただけよ～それより王母様なんて他人行儀な言い方はやめてつていつも言つてているでしょ～う？阿黒」

なにやら複雑な事情があるようでござります、その証拠に王母の右に控えます麗人、かの黄帝を

導いた戦女神にして、王母様の側近中の側近、九天玄女様のご機嫌がいつもの八百倍ほど麗しくなっています。

一言で申し上げますならばクールビューティーと評すべき玄女様が、傍目にお怒りなのがあります。

「（か、帰りたい…）」

急速に冴がしくしくして来た黒狼くんがござりますが、逃げ出るわけにもいきません。

さてさて、このさわやかなお茶会には、他にも数名出席者がござります。

王母様の「長女」、第一公主様と末娘である第六公主様です。

第一公主様は先だつて天界にて役職を得たものの、あまりの美貌に男共が騒ぎを起させれ、天帝

陛下の命で搖地への帰還命令ができる程の伶人…なはずなのでござりますが、見た感じは、どこかふわっとした、一言で申し上げるなら天然系のお方でござります。

もちろんお仕事は出来る方なのですがね

いまだ幼児というよりは赤子の領域に近い第六公主様は、なにが嬉しいのか黒狼くんの膝できやつきやと騒いでおられます。

まさに可愛い盛りのころ「他人の赤ん坊程可愛いものは無い」と俗には申しますが、イメージされますならば育児雑誌の表紙を飾るような、^{いと}幼けなく愛らしきお子様でござります。

ほっぺたっぷにふにしたいですね…おつと失礼。

さて本日のお茶会の話題は王母さまの「ちょっとした事情で縮ん

だこと」から始まり、お決まりの黒狼くんのお母様の話へとなりました。

王母様にしてみれば、共に生きるひととの叶わなかつた可愛い我が子。

何度も何度もせがまれ、あれこれと話をする黒狼くんで「じやこます。

人界における人間の寿命は精々八十程、それを考えると黒狼くんのお母様は、確かに神仙の血を引いていた様で。実に九十九歳での大往生、見た目も二十は若かったです。

そんなお母さまの武勇伝やら、なんやらを話していくうちに、楽しい時間はあつという間に過ぎ。もう限界とばかりに、玄女様が柳眉を吊り上げ、麗しい眉間に皺を寄せ、王母様を攫つて行つてしまします。

そして普通はそつそつと、富殿を追い出されてしまう黒狼くんですが…

なにやら様子が違います。

「黒狼殿はしばしここでお待ちを」

「なあに? 玄女つたら妾を追い出して、黒狼と内緒話なの? するいわ」

「……王母様」

玄女様の絶対零度の声に、さしもの王母様もたじたじ。黙つて玄女様に従い執務室へ連行されて行きます。

それを見送りつつ、思わず独り言。

「なにかまずいことでもしましたかねえ?」

冷めたお茶を啜りながら、頭をひねつていおりますと、玄女様が公主様“方”を伴い戻つて参りました。

第一公主様と第二公主様で「ござります。

髪をきつちり結いあげ、衣装もどこかかつちりとした、キャリア

ウーマン的な第二公主様、黒狼

くんは彼女を「紅梅の君」などと呼んでおります（ちなみに第一公

主様は「百花の王」にちなみ牡

丹の君と…気障つたらしいですな、けつ）

「紅梅の君。ごきげん」

「麗しくないのよ、黒狼殿」

「はあ」

思わず間抜けな相槌を打つ黒狼くん。

玄女様同様第二公主様のご機嫌も麗しくないらしく。一人第一公主様のみが困ったような微笑を浮かべてあります。

「瑠姫様と太真様が行方知れずなのです、この瑠地の何処にも居ません」

衝撃的な玄女様のセリフに思わず呆然といたします。

「（い、居ないって 脱走？いや家出か？）」

「貴方が、瑠姫に下界の話やら、妖怪退治の話など聞かせるから、無駄に興味を持つてしまつて」

耳に痛い第二公主様のお言葉。

「してお二人は何処へ？」

「妹々に探らせているけど」

残る妹姫で、その手の術を得手とする第三公主、蘭華の君が居ないのはその為ようです。

「王母様に内緒ですか？」

「お母様に任せていたら何時まで経つても問題は解決しないわ

第一公主様が嘆息致します。確かに王母様の性格を考えると、面白がつて連れ戻さないことで

しう。放任主義と申しますか、なんというか……

突然、部屋に女性の幻影が現れます。

「大姐、二姐　つて、あらやだ黒狼様もいらしたの」

幻影を送つて参りましたのは、第三公主、蘭華の君でござります。外見年齢はまだ十代後半でございますが、どこか妖艶な美貌の片鱗を見せる美少女でござります。

「二人の行き先はわかつたの？」

「厄介よ、人界に居るかと思つたんだけど、どうも他の『界』に落ちこちたみたい」

第一公主様の問いに、深刻な声で第三公主様は答えました。

界とは人界や冥界の「界」とは異なります。

この世界に存在する、他の独立した世「界」の事でござります。今のところ十個ほどの存在が確認されており、黒狼くん達住むのは「四界」つまり四番目に古い「界」なのです。

各界は様々な特徴を持ち、文明の段階や世界を構成する要素、全てが界」とに違います。

特に力あるのは、一から四の四つの界。

「一界」は最古の「界」で、随分と昔に寿命を終え消滅してしまいました。しかし住民達は高度に発達した精神文明を築いたため。消滅の際に肉体を捨て、精神生命となり脱出、この四界にも少なからず住んでおります。

「二界」は「一界」消滅後、自分達の「界」の消滅に怯えて「三界」の侵略を開始。しかし失敗し、逆に消滅してしまいました。いやはや自業自得ですが、高度な機械文明を誇る文明だつたそうです。

「三界」は「一界」の侵略に対し界を「封鎖」と呼ばれる対抗策を取り、以来そのままで、現在中がどうなつてゐるのか、知る術がございません。

「五界」以下になると、他の界の存在を知るのは住民の一握りとなります。

そういう方向に文明が発達しきっていないのですな。

「私が探しに参りましょ、」と他の『界』に向かつたとなれば、一刻を争います

「王母様にもお知らせせねばなりませんね」

玄女様が嘆息なされます、気苦労が耐えないお方ですな。

「黒狼殿、できれば私も」

「あ～二姐、抜け駆け狡いわ！はい、はい、わたしも行きたいです！」

紅梅の君が口を開いた途端、蘭華の君が叫びます。

むつとした表情で紅梅の君が蘭華の君に食つて掛かります。

「妹々、遊びではないのよ？」

「そんなことぐらい解つているわ。でも大姐も二姐もお役目があるでしょう？だから無役の私が行くのがちょうど良いわ」

「むつ……」

なぜかにらみ合つお一人。

「（そんなに他の「界」に行つて見たいのでしょうかね？）」

いや、まあそうではないんですよ黒狼くん…ちつリア充が爆発しる。

「牡丹の君」

黒狼くんがそう言いますと、にらみ合つてこたはづのお一人が、ぱっと牡丹の君を見ます。

視線にはかなり熱が籠つておりますな。

「（牡丹の君が諫めてくれれば、お一人とも諦めるだらつ…正直、足手まといだし）

さて牡丹の君の裁定は？

「そうね、黒狼殿の足手まといにならないのは私ね」

「いっしと笑つてそうおっしゃります。

「はあ？」「なつ」「ええつ」

声をそろえ驚く二人。

「大姐！！それは」

「そんなの狡い！！」

すがるような様子で、黒狼くんは玄女様に視線を向けます。

「それが妥当でしょう、よろしく頼みましたよ？黒狼殿」

あら玄女様まで……おやおや黒狼くんが、がくりと「〇ー」をかましてますな。

「あら黒狼殿は私ではござ不満？」

世の男子諸君が憧れる微笑。黒狼くんは降参することにしたようです。

「いえ、とにかく急ぎましょ！」

「ええ」

嬉しそうに牡丹の君はおっしゃりました。

自力で他の界へ渡る。それはごく一部の仙人にのみが可能な秘術でござります。

ではどうするか？

答えは一つ。皆様も某国民的週刊少年漫画雑誌でお聞き及びのアレ……「宝具」とも呼ばれる、四界においては「仙術具」と呼ばれる道具を用いるのです。

瑠地の宝物庫。

そこは実用品からガラクタまで、様々な仙術具が、無造作に放りこまれた「混沌」。管理もいい加減で、錠も付いていません。

「ここ」の管理はもつと厳しくないと駄目ねえ

そうでしょうとも、といわんばかりに黒狼くんが首を振っています。

「ありました、これなら他の界に行けます」

黒狼くんが金色の腕輪を第一公主様に渡します。「界渡り」の仙

術具らしいですな、同じ物を黒狼くんも身につけます。

「八界あたりだと良いのだけど」

公主様が腕輪を嵌めながらおっしゃります。

八界は世界全体が丁度四界の人界に良く似た世界、古代中国風の世界でございます。

四界の人界よりも随分と歴史は進んでおりますが、それでもいきなり現代日本のような五界や、

中世風ファンタジー世界である六界よりはマシというものでしきう。「最悪なのは九界か十界だった場合ですね……太真様が御一緒で、かえつて良かつたやも

知れません」

ちなみに九界は核戦争で荒廃した世纪末世界、十界は地球外生命体に侵略されている未来世界です。

おお、恐ろしいですな。

「そうね、瑠姫も太真が一緒になら無茶はしないだろうし」

それは身贋頗るなのでは?…どうやら黒狼くんもそう思つたようですが、賢明にも口には出さないようです。

「太真様は幼くとも、しつかりしたお方ですから」「そう?」

「はい。さて準備が出来ました、参りましょう竜吉様」「ええ」

次の瞬間、二人の姿は宝物庫から焼き消えたのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5149y/>

出奔幼公主 是 騒動的始事

2011年11月17日21時18分発行